編　集　後　記

先日、『ジャーナリズム』という月刊誌を発行している朝日新聞社内の「ジャーナリスト学校」主任研究員から取材を受けた。この月刊誌で、ジャーナリズム研究を行っている全国の大学の特集をやる、という話だった。

この主任研究員氏がぼそっと言った。名古屋大学国際言語文化研究科のメディアプロフェッショナルコースは、東京大学の「情報学環」と北海道大学の「国際広報メディア・観光学院」と並ぶ「国立大学で3つしかないメディア教育機関ですよね」—。

何が言いたいのか、すぐ分かった。東大も北大も相当の大きい規模で、活発に動いているが、名大の場合はまだコースで、規模が小さいですね、という感想である。お互い、そんな本音をあえて口にすることもなく、自然な成り行きで、話は当コースが6年前の発足の時以来抱えてきた諸問題の一部に及んでしまった。

まさにその「諸問題」のあおりで、昨年コースに劇的な変化が起きた。

昨年4月から、当コースの体制は大きく変わって、9人いた常勤教員は3人減り、6人になった。他方、学生数は増えているので、教員はすさまじい忙しさである。その上、将来に備えて、コースを整備し、教育内容も充実していかなければならない。いったん閉講された「企業広報論」も地元の大企業5社の協力で再開することができた。その他、いくつか新たな授業も設け、将来への布石を打ったつもりである。

そんな慌ただしい状況下で、廃刊された旧雑誌『メディアと文化』に代えて、『メディアと社会』創刊号を発行できたことを大変うれしく思う。発刊に協力していただいた各教員、投稿者、国際言語文化研究科の諸兄姉に心から感謝したい。

おかげで創刊号はバラエティに富んだ内容になった。世界で最も激しい変化が起きている中国関係では、「中国の政治システムと共産党機関紙」の現状を追究した論文のほか、日中で20世紀前半に発行された総合雑誌『太陽』と『東方雑誌』の交流のさまを描いた論文、チベット暴動と四川大地震の跡を撮った写真グラフもある。

映画関係の論文では、「戦時下の日本映画と家族主義」「古典的ハリウッド映画と日本映画の近代」がある。「インターネット時代の宗教と主体」や研究実践報告「ITを活用した街の活性化」なども含め力作がそろった。

表紙は池側隆之准教授制作のセンス溢れる作品である。

本誌を、ジャーナリズムから広告・広報、メディアの文化論的研究、映像に至るジャンルまで充実し、当コースの将来の発展の土台にしたい。私の在籍はあと1年しかないが、のんびり過ごすことが許されない状況にあることは認識している。　　（春名）